

# 森林流域に関する社会調査

吉岡崇仁（京都大学フィールド科学教育研究センター）

## 1. はじめに

今まで、水域や流域を対象として、自然科学調査を行ってきた。流域環境の変化は、水の流れに乗って流域内を伝搬し、森、川、里、海の各生態系に影響を及ぼすことは明白な事実である。これに対して、京都大学フィールド科学教育研究センター（フィールド研）では、森林から沿岸域までのつながりを森里海の連環と呼び、「森里海連環学」を標榜して今に至るが、新しい学問領域創出の意義は何であろうか。

研究対象の「場」としては、(1) 森、里、海とそれらをつなぐ川、(2) 里の影響で形成され維持される里山・里海（川は要素として組み込まれる）、(3) 流域全体を表す森里海（森里川海）がある（図1）。

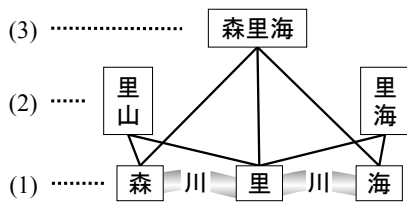


図1 森・里・川・海の空間レベル概念図

それぞれの「空間」レベルにおいて、自然科学、人文社会学の研究がなされてきた。フィールド研がめざす「森里海連環学」は、(3) を対象とすれば実現するのであろうか。「里」を場と考えるなら、(2)

(3) の空間、つまりは生態系を対象とした自然科学研究があり、すでに多くの研究がなされていると思う。また、これら生態系への外圧として人間活動という「里」を扱った研究がある。古くは、公害研究、環境科学研究があり、この枠組みでとらえることができる。自然科学から、疫学・医学、政策学、民俗学、歴史学など様々な分野の研究が行われてきた。これらの研究と森里海連環学は、違うのだろうか。

環境の変化の原因が人為による場合は、改変の意図を持つ人々と改変の結果を見つめる人々という立場の違いによって、環境変化の評価も異なってくると考えるのが妥当であろう。環境心理学、社会心理学の分野の研究に当たると考えられる。演者は、2001年に文部省（当時）の研究所として創設された総合地球環境学研究所（地球研）と、2003年に京都大学

の学内共同利用施設として設置されたフィールド科学教育研究センターの二つの組織において、森林流域に関する研究プロジェクトに携わり、自然科学の調査を実施するとともに、森林流域に関する社会調査を実施してきた。この自由集会では、これらのプロジェクトで得られた社会調査結果の一部について紹介したい。今後の陸水学と社会科学の連携・融合のあり方を一つでも提案できればと考えている。

## 2. 環境意識プロジェクト（地球研）

環境に変化が生じた場合、人びとはその環境とその変化を意識し、価値判断をして、環境への態度行動を変更するかもしれない。そして、その変更に応じて環境も変化し……。このような連鎖を「人間自然相互作用環」と呼んだ（図2）。

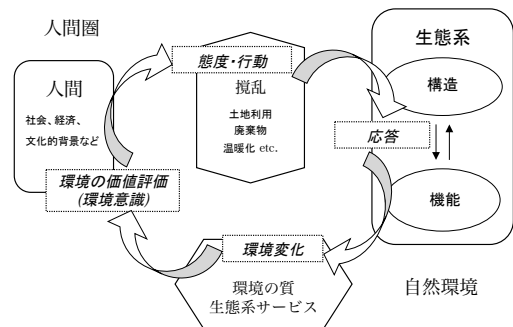


図2 人間自然相互作用環

（図の概略は Collins et al. 2007 をもとに作成）

環境意識プロジェクトでは、環境変化を予測するシミュレーションモデルを開発し、その予測結果を元に人びとの環境意識の変化を測定する手法シナリオ・アンケートを利用した（「環境意識調査法—環境シナリオと人々の選好—」2009、吉岡編、勁草書房）。その成果の一部を紹介する。

## 3. 木文化プロジェクト（フィールド研）

このプロジェクトでは、京都府北部の由良川流域を対象として、森林（人工林）への手入れが、河川、沿岸域の生態系にどのような影響を及ぼすかを調査した。その中で、森林資源の利用者及び森林所有者の意識調査も実施したので、その結果について紹介したい。